

「えびす」等福神名の付く京都市町名について —日本（人）論との関係で—

藤 田 昌 志

关于附上‘夷’等福神名の京都市街名的研究—与日本(人)论关联的研究—

FUJITA Masashi

【摘要】

有的地名一直流传后世。我要根据研究地名阐明有一种日本人的倾向。本研究从调查附上七福神名字的京都市街名进行考察有一种日本人的倾向。本研究的构成如下：
一 序 二 从日本(人)论进行考察的地名研究 三 关于附上‘夷’名字的京都市街名的研究 四 关于附上其他福神名字的京都市街名的研究 五 从日本(人)论进行考察的附上七福神名字的京都市街名的研究—结语—

キーワード：地名研究 えびす 大黒 寛容宥和の精神 同音

一 序

今を去ること 50 年余り昔、京都市中京区の竹間小学校（現在、子供未来館となっている。）で東西の通り名を覚えるために次のような歌を教わった。テレビ CM でも流れたことがあるから御存知の方も多であろう。「丸竹夷^{まるたけえびす} 二押御池^{におし おいけ}、姉三六角蛸錦^{あねさんろっかくたこにしき}、四綾仏高松^{しあやぶつたかまつ} 万五^{まんご}条^{じょう}……。」三つめの「夷」は「夷川通り」のことで、教わった時には小学校低学年ということもあり、特に疑問に思うこともなかったが、語源＝ことばの由来に興味を持ち始め、漠然とではあるが、どうして「夷（エビス）」という名が付いているのだろうと思っていた。そのことに興味を持ったのが本稿作成の出発点となっている。

二 日本（人）論から見た地名研究

日本人は必要な外来事物を尊重して上手に受容して来た。遠くは飛鳥・奈良時代に仏教を受容する際に、日本土着の迷信打破の面と鎮護国家の法としての面の両方を中心として受容した。儒教についても、『孟子』の禪讓^{ぜんじょう}放伐^{ほうばつ}説^{せつ}（天子がその位にいられるのは天命を

受けている間だけであり、天の信頼を失ったなら、その地位を去らなければならないという説)は採らず、『孟子』を積んだ船は中国から日本に向かっても海上で遭難するという伝説がまことしやかにささやかれた。

中村元(1989)⁽¹⁾は「日本人の思惟方法」について①与えられた現実の容認②人間結合組織を重視する傾向③非合理主義的傾向—をその特徴として挙げている。地名にもそうした日本人のある種の傾向が表れているのではないか。私はそうした日本人の持つ傾向(ベネディクト風に「日本文化の^{タイプ}型」と言ってもいい)を地名研究を通して探りたいと思う。

本稿で採りあげるのは—「えびす」等福神名の付く京都市町名—であるが、そのテーマを通して、以上、述べたような日本人の傾向を探りたいと思う。

まず「夷川通り」(中京区)の地名語源が問題になる。そして「夷」の語源、更に「えびす」「えびす」神の内容、「えびす」や他の福神名の付く京都市町名、そして他の福神と「えびす」神との関係などが問題となる。以下、各論に移る。

三 「えびす」の付く京都市町名について

三-1 「夷川通り」について

夷川通りについて『坊目誌』は「東は岡崎町字徳成地—俗に熊野道—に起り、西は堀川に至る。寺町以西は慶長七年二条城を築くを以て閉塞す」と記す。又、その名称については「天正以前小川の支流北より来り東流して西洞院川に合す。此僅少なる流域を夷川と称す。爾來街名と為る」と記している。更に宝暦12(1762)年刊『京町鑑』には、「古老云、往古西洞院中御門今いふ榎木町に北山の下流あらはれ、又此辺に蛭子社有しゆへ恵比須川と号し、其後次第に人家建つづきしゆへに通の名とす。應仁亂に此社亡滅し川も埋れ侍りしが不思議に蛭子の尊像残り今六角堂の西隣不動院といへる寺に傳はり有中古より蛭子を夷に書誤れり」と夷川通の由来を記している。つまり「夷川」とは昔、「蛭子社」があった川という意味で、「蛭子」が後に書き誤られて「夷」となったということになる。ここから次に「^{えびす}蛭子」の由来、語源は何なのかという問題を解明する必要が生じる。

三-2 「えびす」について

吉井良隆(1999)「えびす神研究」によると、普通一般には「「えびす」は「えみし」すなわち蝦夷の転訛なり、とする説がほぼ定説化せられてきている。」また「平安末期に至り、えびすの語が独立語として盛んに用いられるようになると(筆者注:従来の「蝦夷(同化しない異民族)」を呼称する語として「えぞ」という言葉が生じてきて、同時に「えみし」より変化した「えびす」も独立語化し、意味上の変化が生じてきたこと)、一方、漢字の夷・

蛮・戎・狄・辺などをえびすの文字にあてるようになり、漢字から受ける感覚にもとづき、みづから意味上に大きな変化をもたらすこととなり、蛮民・異族とかの観念から夷俘・俘囚（いずれも国語としてはえびすである）となり、やがて武士の代名詞ともなり、さらには猛々しく勇武なるものを指すようにまで変化をとげる⁽²⁾ことになる。

「えみし」自体の語源については本居宣長が『古事記伝』で「蝦夷は延美斯なり、名ノ義は身に凡て長き鬚^{ヒゲ}の多きを以て蝦^{エビ}になぞらへたるなり」（伝二十七）と述べているが、ほとんど「仮定、憶測の域を出ない⁽³⁾」ものである。次に「えびす神」について少し考察してみる。吉井（1999）は「えびす神」について次のように言う。吉井（1999）によると「えびす神」＝「えびす様」の主祭神は①大国主神②事代主神^{ことしろぬしのかみ}③蛭児（子）神である。①は②より多く、③は①②より古い。

『古事記』によると②事代主神は①大国主神の御子神であり「高天原より天孫降臨の露^{たかまがはら}払いとして建御雷神^{たけみかづちのかみ}らが遣わされた時、御大の前（美保の岬）^{みほさき}で鳥を射たり漁をしたりして」たが「国を譲るか否か、父の大国主神から回答を任され、結果、天照大神への恭順を誓^う」⁽⁴⁾。

③蛭児（子）神はえびす神の総本社である西宮神社の主祭神で、約半数のえびす社が蛭児神を奉斎している。伊邪那岐・伊邪那美の二神が国生み、神生みの際に蛭子を生んで、その子を船に載せ、流しやったという話は『古事記』『日本書紀』にある通りである。（『古事記』では国生みの際に、『日本書紀』では神生みの際に蛭子が生まれるという差はある。）「ヒルコ」の「ヒル」については「ヒルムの意で、痿へ撓む、萎縮する」意味とする白鳥庫吉の説⁽⁵⁾や「ひる」は「夜」に対する「昼」で「日」を意味し、「ひるこ」は「日女」に対する「日子」^{ひるこ}の意であるとする説⁽⁶⁾がある。

次田真幸（昭和48）は「ひるこ」の概念内容について概括して次のように言う。「倉野博士の述べられたように「ひるこ」を太陽神とする信仰は日神大日靈貴^{ひのかみおおひるめのみこと}や天照大神の観念、信仰の成立よりも古いものと思われる。とすれば、「ひるこ」の本来有した太陽神的要素は、天照大神の観念によって吸収され代表されることとなって、「ひるこ」は「蛭児」の文字の示すような産み損じの不祥の子とされ、流し棄てられることになったものと考えざるを得ないであろう⁽⁷⁾。

蛭子は後世、夷神と混同され、兵庫県西宮市の西宮神社に祭られるが、「夷神」は漁業の守護神として広く漁民の間で信仰されていて、堀一郎博士は「エビスはその語源から見ても異郷からの来訪神、漂着民の意」であるとしている⁽⁸⁾。

次の文章は「ひるこ」についての総合的記述であると言えるであろう。「ひるこ」の太陽神的な要素は、天照大神の信仰に同化吸収され、日神としての要素を喪失した「ひるこ」

は、蛭子として、また脚の立たない不具の子という理由のもとに、海に放ち棄てられることとなり、神統譜からも除かれたものと考えられる。「ひるこ」が夷神の信仰と結合したのも、「ひるこ」が元来は太陽神として、船に乗って渡海する神と考えられたことによるのであろう。太陽神としての要素を失った蛭児は、海からの漂着神、来訪神としての夷神の信仰と合体することによって、広く漁民の信仰を集めたものである⁽⁹⁾。

「えびす」神は古来、海の^{かなた}彼方より幸をもたらず神として信じられていたが、室町期に成立した七福神信仰の中に日本唯一の神として加えられ、同時に市場神、商業神となった。更に近世に入ると、福の神「えびす・だいこく」とペアでもてはやされた⁽¹⁰⁾。

既引用のように^{エビス}夷とは元来、異邦人の来訪神、漂着民の意と考えられるが、次の一文（鈴木（1999）⁽¹¹⁾）はきわめて示唆的である。

日本人とはつくづく不思議な国民で一方で境界の人々を「えびす（夷・戎）」と侮蔑しながらも、一方では同じ音を持って「えびす様」として福神に^{あが}崇め奉ってきました。またイザナギ・イザナミの間に産まれた子ながら、手足の^な萎えた骨のない^{ひるこ}蛭子を、同じ「えびす」として習合する感覚も飛躍的な想像と言えるでしょう。おそらくは外来の漂着・^{まろうどしん}客人であった「えびす」が我々の最も身近な福神に昇格するためには、^{きしゅりゆうり}貴種流離を地で行く蛭子の存在が必要だったのかも知れません。

かつての日本人には善であれ悪であれ非日常的なパワー（力）のあるものにあやかり、そのパワーをわがものにしようとする考えがあったようである。御霊信仰はその代表的なものであり、それは非業の死を遂げた非日常的なパワーによって自らの願望も成就させようという考えである。「えびす」には海からの漂着神、来訪神としての側面があるが、それが動物であっても、非日常的でパワーのあるものであれば何ら問題にはならない。現に「恵美須浦」の「えびす」などは鯨を指している⁽¹²⁾。

三-3 「えびす」の付く京都市町名について

ここでは「えびす」の付く京都市町名について考察したいと思う。最初に考察方法について述べておくことにする。まず便宜上、右京区、上京区、北区、左京区、下京区、中京区、西京区、東山区、伏見区、南区、山科区に分け、各区の「えびす」の付く町名を（2003）『ニューエスト26 京都府都市地図』昭文社の「町名索引」（87-97頁）の順序にしたがって①②③...と番号をふり、町名の由来（日本歴史地名大系第二七巻（1979）『京都市の地名』平凡社の記述を主たる根拠とする。（（^京〇〇〇頁）と記す。）その他、藤田の考えによる

場合は（藤田）とする。）によって分類した。次はその分類・考察結果である。

I. 大黒町に対する呼称及び大黒町との関係から「えびす」の呼称が付けられたもの …4例…

- 1.（上京区③）蛭子町（上、上立売通浄福寺西入）（「坊目誌」は町名由来を北隣の大黒町に対する呼称とする。（㊦636頁）
- 2.（下京区①）蛭子町（下、^{カギ}鍵屋町通新町東入）（「坊目誌」は「大黒町に対する呼名あり。俗に蛭子大黒を以て一双とす」という。（㊦924頁）
- 3.（下京区②）恵美須之町（下、寺町通仏光寺下ル）（仏光寺通寺町西入（恵美須之町の西隣）には大黒町があることによると考えられる。（藤田）（㊦844頁）
- 4.（中京区②）恵比寿町（中、河原町通三条上ル）（「町名は、寛永版平安城東西南北町並之図に「大こく丁」とあるが、それ以降は、筆描図系・木版図系とも「夷丁」とある。天保二年（一八三一）改正京町絵図細見大成は「蛭子町」と記す。」（㊦697頁）

II. 夷川があったことから「えびす」の呼称が付けられたもの …3例…

- 1.（中京区①）夷町（中、間之町通夷川下ル）（「町名由来は「坊目誌」に「夷川の南にある故なり」とする。」（㊦723頁）
- 2.（中京区③）西夷川町（中、夷川通堀川東入）（「町名は、寛永一四年（1637）洛中絵図に「西夷川町」とある。」（㊦735頁）
- 3.（中京区④）東夷川町（中、夷川通西洞院西入）（「坊目誌」に「元此地に夷川あり、称呼之に起る」とある。」（㊦735頁）

III. 蛭子社があったことから「えびす」の呼称が付けられたもの …2例…

- 1.（下京区⑥）^{えびすみずちょう}蛭子水町（下、正面通西洞院東入）（「町名由来は「坊目誌」に「往時此地に蛭子社あり」、室暦一二年（1762）刊「京町鑑」に「此町北側に蛭子水の旧跡有」と各々記される。」（㊦962頁）
- 2.（東山区①）^{えびすちょう}夷町（東、三条通白川橋東入三丁目）（「町名は中世蛭子社があったのにちなみ、「山州名跡志」（正徳元年刊）に「件ノ旧地ヲ今尚蛭子町ト云フ」とみえる。蛭子の社の神像は伝教大師作と伝える二尺の坐像で、同書に「其地ニアリシコトハ、洪水ニ流来セリ。其元ヲ知ラズ」とある。開町（1647）に際してこの像を金蔵寺に移した。」（㊦312頁）

IV. 蛭子大黒の木像が流れ来たという言い伝えから「えびす」の呼称が付けられたもの …2例…

- 1.（下京区③）^の夷之町（下、七条通新町西入）（「町名由来は、「坊目誌」に「中世洪水に西

洞院渠に蛭子大黒の木像流れ来る。住民之を得て小祠を建て之を祭る。夷之町之に起る」と記す。(㊦ 959 頁) 2. III-2 に同じ。

V. 何故、「えびす」の呼称が付けられたか不明のもの …9 例…

1. (上京区①) 夷川町 (上、西洞院通樵木町下ル) (㊦頁. 600)
2. (上京区②) 蛭子町 (上、猪熊通出水上ル) (㊦630 頁)
3. (下京区④) 夷之町 (下、間之町通六条下ル) (㊦904 頁)
4. (下京区⑤) 夷馬場町 (下、北小路通壬生西入) (㊦984 頁)
5. (下京区⑦) 惠美須屋町 (下、富小路通高辻下ル) (㊦850 頁)
6. (東山区②) 蛭子町北組 (東、蛭子町) (㊦260 頁)
7. (東山区③) 蛭子町南組 (東、蛭子町) (㊦260 頁)
8. (伏見区) 惠美酒町 (伏見区撞木町) (㊦381 頁)
9. (山科区) 日ノ岡夷谷町 (山科区日ノ岡夷谷町) (㊦336 頁)

以上、「えびす」の付く京都市町名について日本歴史地名大系第二七巻 (1979) 『京都市の地名』(平凡社) による由来を中心として分類したが、興味深いのは I. IV. のように「大黒」との関連で「えびす」の呼称が付いていること、また III. のように「蛭子社」が「えびす」の呼称の由来となっていることである。ここに単に「えびす」の付く京都市町名を調べるだけでなく、他の福神名の付く京都市町名も調べる必要性が出てくる。そして、そこに何らかの傾向性、特徴が見い出されるなら、それは日本 (人) 論の深化にも寄与するものとなるであろう。

次に、他の福神名の付く京都市町名について考察してみたいと思う。なお考察方法は「えびす」の付く京都市町名の考察方法と同じである。

四 その他の福神名の付く京都市町名について

四-1 全体的考察

「えびす」以外の福神名には次のものがある。大黒・毘沙門・弁財天・布袋和尚・福祿寿・寿老人である。

以下にその考察結果を記すが、結果から言うと「えびす」以外の福神名の付く京都市町名の中で一番多いのは大黒の付く町名で、13 あった。その次が毘沙門の付く町名で 9、更に弁財天の付く町名が 7 と続く。そして布袋の付く京都町名が 1 である。このことについて次のような示唆的な考えがある。

このように福神に由来する町名を列記してみると、二つの点において特徴的なことが指摘できよう。一つは福神に由来する名称とはいえ、それは惠美須・大黒・毘沙門・弁財天の四つが圧倒的に多く、布袋和尚・福祿寿・寿老人の名称を付す町が、ほとんど

どみられないということだ。そして今一つは、それら福神名称の多くは、もと洛中と呼ばれ、平安時代より京都の市街地を形成した地域にみられるということである。

前者の名称の偏向については、その疑問に答えるべき準備がないが、恵美須以下の四つの福神は、いずれも富貴に関連するものであり、それに対して布袋以下三つの神々は、長寿に関わるものである。したがって、強いてこの問いに対する解答をうち出すとすれば、商工業に多く携わった町衆たちは、当然のことながら富貴に対する関心の方が、より強かったことの結果であるかもしれない。

また後者については、今更ことごとしく述べるまでもなく、町衆の住む彼らの町々に、彼らの信仰の名称を付して、富貴という望みが達せられることを願ったからにはほかならない⁽¹³⁾。

「えびす」(19例)「大黒」(13例)「毘沙門」(9例)「弁財天」(7例)の各福神名の付く町名が多い理由を「富貴に関連するもの」であることに求める考えである。(数の面で「えびす」「大黒」というペアを成すものが非常に多いのは興味深い。)

通時的関係で見た場合、「えびす」はやはり一番古く、弁財天は平安時代に、毘沙門天も平安時代初期にすでにその信仰があり鞍馬寺などが有名である。大黒は本来、インド古来の神で、仏教に取り入れられ、中国を経て、やはり平安時代に日本に入ってきている。もっとも福神信仰については「室町時代に至って飛躍的に拡大・発展し、その町衆たちの信仰の余韻が、今も町名として受け継がれている」ものである⁽¹⁴⁾。

以下、各福神名の付く京都市町名について福神名別に考察していくことにする。

四－２ 大黒の付く京都市町名について

既述のように大黒の付く京都市町名は13ある。次のものである。

I. 「えびす」の付く町名等が近くにあることから「大黒」の呼称が付けられたもの …5例…

1. (上京区①) 大黒町(上、猪熊通樵木町上ル) (「寛永14年(1637)洛中絵図に「かぎや丁」とあり、天保2年(1831)改正京町絵図細見大成で「大黒丁」と出る。現町名は二町隔てた北の蛭子町^{えびす}に対する呼称であろう。(「坊目誌」)(㊦631頁)) 2. (上京区②) 大黒町(上、浄福寺通上立売上ル) (「宝暦12年(1762)刊「京町鑑」に「大黒町又名鶴屋町とも云」とあり両町名が併用されたい。…大黒町という町名は南の蛭子町に対応する呼称とも考えられる。)(㊦636頁)) 3. (下京区①) 今大黒町(下、黒門通仏光寺下ル)

（「寛永 14 年（1637）洛中絵図に「今大黒町」とすでに現町名が使用される。「坊目誌」は南に隣接する杉蛭子町すぎえびすちようにたいして名付けられたとする。」（㊟887 頁）4.（南区①）大黒町（南、大宮通八条上ル西側）（東北に上夷町かみ、南夷町があることによると考えられる。（藤田）（㊟1005 頁）5.（下京区④）大黒町（下、仏光寺通寺町西入）（東に恵美須之町があることによると考えられる。（藤田）（㊟846 頁）

II. 大黒天堂があったことから「大黒」の呼称が付けられたもの …1 例…

1.（東山区③）大黒町（東、大黒町通松原下ル三丁目）（「この町の面する街路に寿延寺じゆえん大黒天堂の所在したことにより、通り名・町名ともに大黒町を名乗る。」（㊟239 頁）

III. 洪水の際、蛭子・大黒の両像が流れ来たったという言い伝えから「大黒」の呼称が付けられたもの …1 例…

1.（下京区②）大黒町（下、七条通油小路東入）（「町名について「坊目誌」は「古老の云ふ」として、中世西洞院川の洪水の際、蛭子・大黒の両像が流れ来り、当町は大黒の像を祀り、東隣の町は蛭子像を祀り、ともに町名としたと記す。」（㊟974 頁）

IV. 何故、「大黒」の呼称が付けられたか不明のもの …6 例…

1.（中京区①）大黒町（中、釜座通夷川下ル）（西北に毘沙門町、東北に弁財天町が有ることが関係していると考えられるが確証はない。（藤田）（㊟732 頁）2.（上京区③）大黒屋町（上、油小路通下長者町下ル）（㊟602 頁）3.（下京区③）大黒町（下、室町通五条下ル）（㊟922 頁）4.（東山区④）大黒町（東、大和大路三条下ル東側）（㊟ 183—184 頁）5.（伏見区①）西大黒町（伏、西大黒町）（㊟387 頁）6.（伏見区②）東大黒町（伏、東大黒町）（㊟387 頁）

以上のように大黒の付く京都市町名は 13 あるのであるが、I. については、「えびす」「大黒」のペアの意味が問題となる。そもそも「えびす」は既述のように日本古来の神である。他方、「大黒」＝大黒天はインド古来の神で元はマハーカーラと言う。マハーは大の意で、カーラは時、又は暗黒の意を表し、大黒天は暗黒、死の支配者である。マハーカーラはインドの全知全能の神、シヴァ神の一化現、分霊ともされ、「破壊と建設の輪廻を示す神」であるから、非常に恐ろしい神である⁽¹⁵⁾。その恐ろしい神がなぜ信仰されるのかというと「恐ろしき災厄を逃れたいために恐れうやまい、わざわいのこないように祈ることから、わざわいを避け得られたときにその仕合わせを感謝する意味が生まれ、やがてその靈威をなだめ慰めて福を得ようとする、マハーカーラが福神に転じる萌芽はここから発生す

る」⁽¹⁶⁾からと言える。又、日本にも御霊信仰（＝「悲惨な目に遭って死亡した者や不慮の死によった者の怨霊を鎮めるために神社に祀り、崇りのないように祈りそれがやがて福分を得るように願う傾向」⁽¹⁷⁾、信仰となったもの）が存在した。大黒天日本化の素地があったと言える。大黒天が仏教に取り入れられた当初は依然として恐ろしい神であったが、中国では食厨の神となった。つまり、人々の飲食を保護・保証する神となった。日本へも食厨の神として伝播した。伝承では、最澄（伝教大師）が唐から帰朝した時、大黒天を安置したのが一番古いとされる⁽¹⁸⁾が、その大黒天はインドの元来の「裸形の三面六臂の忿怒像のごとき姿」⁽¹⁹⁾であったと考えられる。

平安時代は本地垂迹の説が盛んで、「大黒天も日本古来の神である大国主命と習合することによって、大黒天の日本化が急速に」⁽²⁰⁾進んだ。それは「大黒」と「大国」が同音ということにも由来するが、既述のように吉井（1999）が「えびす神」の主祭神の一つとして「大国主神」（他は事代主神、蛭児（子）神）を挙げているのは重要である。ここに「大黒天」＝「大国主神」＝「えびす神」の接点が生まれるからである。「大黒」については「大黒が同音の故に大国主に習合されたと同様に易の「太極」にも重ね合わされ、その結果、家屋の根源とも言うべき、その中央の最も大切な柱が「大黒柱」とも「太極柱」とも書かれるようになる」⁽²¹⁾という説もあり、大黒天普及の一因となったと考えられる。

今一度まとめると「えびす神」は元来、日本古来の神であり、「大黒天」は、インドの神である。「大国」と「大黒」が同音のゆえに「大黒」は習合され、大国主神が「えびす神」の主祭神の一つであることから古人は両神をペアとしたのではないだろうか。それが町名にも反映しているものと考えられる。

大黒町名で注意を引くのは既述のようにIV. -1（中京区①）大黒町（中、釜座通夷川下ル）が西北に毘沙門町、東北に弁財天町があることと関係があるのではないかと考えられることである。三面大黒天（＝武門大黒天。中央は大黒天、右は毘沙門天、左は弁財天）を想起するのである。

四－3 毘沙門の付く京都市町名について

毘沙門の付く京都市町名は9あり、以下のものである。

I. かつて毘沙門堂があったことから「毘沙門」の呼称が付けられたもの …4例…

1.（上京区⑥）毘沙門町（上、今出川通上ル四丁目西入）（「建久6年（1195）平親範が太秦の平等寺・五辻の尊重寺・伏見の護法寺の三カ寺を合わせ、一寺として再興したとい

う毘沙門堂が、寛文元年（1661）公海僧正によって安朱稻荷山（現山科区）に移建されるまでであった（「平親範置文」洞院部類記・雍州府志）（㊦543 頁）2.（上京区⑦）毘沙門横町（上、塔之段寺町通今出川上ル三筋目西入）（「寛永 14 年（1637）洛中絵図に「毗沙門横町」と現れる。応仁の乱で焼失した毘沙門堂の旧地（「坊目誌」）。」（㊦543 頁）3.（中京区⑤）毘沙門町（中、西洞院通竹屋町下ル）（「京雀」に「そのかみこの町に毘沙門堂あり今は姉小路通あぶらのこうちを西へ入町かぢや町の北行にうつしかへて侍べり」とある。」（㊦732 頁）4.（東山区⑤）毘沙門町（東、東大路通松原上ル三丁目）（「毘沙門町の名は安井門跡（蓮華光院）の本尊毘沙門天にちなむ。」（㊦220 頁）

Ⅱ. 毘沙門天の木像が発見されたことから「毘沙門」の呼称が付けられたもの …1 例…

1.（上京区④）毘沙門町（上、七本松通今出川西入）（「町名は町内にある本光寺ほんこうの毘沙門天の木像がこの地より発見されたことによる（「坊目誌」）。」（㊦663 頁）

Ⅲ. 何故、「毘沙門」の呼称が付けられたか不明のもの …4 例…

1.（下京区⑤）毘沙門町（下、若宮通五条下ル）（東南に蛭子町、東に大黒町が有ることが関係していると思われるが確証はない。（藤田）（㊦925 頁）2.（上京区⑤）毘沙門町（上、黒門通元誓願寺下ル）（㊦619 頁）3.（北区①）毘沙門山（㊦なし）4.（中京区⑥）毘沙門町（中、御幸町通竹屋町上ル）（㊦716 頁）

毘沙門天は仏教の神であり、北方を鎮護する神である。仏教では四天王のなかの一神（＝多聞天）に入れられていたが、中国で四天王信仰が盛んになり、「日本でも平安時代初期にはすでに毘沙門天信仰が行われ、鞍馬寺、信貴山朝護孫子寺などが有名で、護法神、戦勝神として信仰された。」⁽²²⁾また「福德神として信仰されるようになったのは中世以降」のことで、「特に七福神のなかに数えられてからはいっそう福德の神と思われるようになった」⁽²³⁾。

毘沙門天の付く京都市町名が現在も残っているのは毘沙門堂（祠）、毘沙門天の木像等がかつてあったことを記憶に留め置こうとする意識の反映であり、それは従来のものを尊重し残そうとする日本人の伝統的意識の表れのように思われる⁽²⁴⁾。

四－4 弁財天の付く京都市町名について

弁財天の付く京都市町名は7あり、以下のものである。

I. かつて弁財天の祠や堂があったことから「弁財天」の呼称が付けられたもの …7例…

1. (上京区⑧) 弁財天町 (上、今出川通新町西入) (「町名はこの地に弁財天の祠があったことによる。この祠は室町幕府九代将軍足利義尚の小川御所の鎮守であったといわれる。(中略) 元龜二年 (1571) 御借米之記 (立入宗継文書) の上京小川組のうちに「弁才天町」とみえる。」(◎581 頁)) 2. (上京区⑨) 弁天町 (上、土屋町通出水上ル) (「坊目誌」は「本町私祭の弁天社あるを以て。近古此名に改む」と記す。」(◎658 頁)) 3. (下京区⑥) 弁財天町 (下、諏訪町通松原下ル) (「寛永 14 年 (1637) 洛中絵図に「弁才天丁」とみえ、以後変化はない。町名については「坊目誌」は「往時弁財天の祠此町にあり故に名く」とし…」(◎912 頁)) 4. (中京区⑦) 弁財天町 (中、新町通竹屋町下ル) (「坊目誌」は「伝へ云ふ往昔此地に弁財天の祠あり。応仁の兵乱に焼失す。天正の頃、西側中央人家の後園井を穿つ時、土中に像を得たり。空海の作と云ふ。故に小祠を営みえを安し、町名とす云云。(下略)」(◎730 頁)) 5. (東山区①) 上弁天町 (東、下河原町通西側、安井前通下ル西裏共) (「大化増補京羽二重大全」に下河原通より「安井御門跡正面の通」を西へ入所として「東側に弁財天堂あり因テ弁天町といふ」と記される。」(◎217-218 頁)) 6. (東山区⑥) 弁財天町 (東、大和大路三条下ル三丁目西側) (「開町以前、この地に弁財天の祠堂があり「雍州府志」に「弁財天ノ社ハ始メ大和橋ノ北ニ在リ、今絶ス(下略)」とみえる。「粟田名勝旧蹟」によれば弁財天社は寛永 10 年 (1633) 6 月、神像とともに青蓮院境内「十禅師の古宮」に遷座したというが(中略) 現存しない。また「坊目誌」は古老の伝承として「往時、洪水の時、弁財天堂、地藏堂を営み、水防を禱りし」と記す。これは「雍州府志」にいう「南ノ方ニ夏禹廟ヲ建テ、北ニ弁財天ノ社ヲ建ツ」として防水を願ったという伝説に対応する。」(◎207 頁)) 7. (東山区②) 下弁天町 (東、東大路通松原下ル(地理的に見て(東山区①) 上弁天町との関連で名付けられたものと考えられる(藤田))(◎218 頁))

以上のように「弁財天」の付く京都市町名は7つあるわけであるが、6. の防水を願ったという伝説にもあるように「弁才天」は元来、河を^{つかさ}掌どる神、すなわち河神である。梵名サラスヴァティと言い、インドの神である。同音であることから元来の「弁才天」は「弁財天」とも呼称され福神へとなくなっていった⁽²⁵⁾。又、河神から言語・音楽・学問・伎芸の神へとなくなっていった。毘沙門天同様、堂、祠がかつて存在したことを尊重し、記憶に残そうとする日本人の意識傾向が福神名を町名として残存させているものと考えられる。

五 日本（人）論から見た福神名の付く京都市町名－結び－

福神名の付く京都市町名については以上の他に「布袋屋町」がある。1例であるが、中京区麩屋町夷川下ルにあり「京雀」には「この町に布袋やといへる家名の細工人ありけるゆへにそのかみはほていや町といひける」とある（㊦717頁）。既引用の如く、「長寿」に関する福神名の付いた京都市町名は極めて少なく、この布袋屋町はその稀少な1例である。

以上のように、福神名の付く京都市町名を考察してきたわけであるが、考察結果を日本（人）論から見ると、最初の部分で引用した中村元（1989）の「日本人の思惟方法」に即して言えば①与えられた現実の容認の顕現として、まず四－3. 毘沙門の付く京都市町名について、で言及したような「従来のものを尊重し残そうとする日本人の伝統的意識の表れ」が指摘できるであろう。とりわけ京都の地名には古い歴史の有るものが多く存在するが、そこには日本人の持つ「崇り」を恐れる心情が一部、反映していることが可能であると思う。えびす像や大黒像が洪水で流れ来たったことを町名の由来とするのも類似の心情によるものと考えてもよいと思う。内藤湖南の言う「そこを占領したからといって、他の氏族が崇敬しておった神社をむやみに取り払ってしまうようなことをしないのがわがいにしへの習俗である」というような従来のものを尊重する日本人の傾向は地名にも反映していると考えられる。

中村元（1989）は日本人の①与えられた現実の容認、の具体的内容の一つとして「寛容宥和の精神」を挙げているが、神仏習合について述べる次の一節は注意を引く。

日本の古来の神々を権現とみる思想は、平安期中期の寛弘年間の典籍にあらわれはじめた。後三条天皇の治世以後に、各神の本地がなんであるかということが問題とされたが、源平時代に入るにおよんで、これこれの神の本地はこれこれの仏である、ということが漸次に定められた。承久年間になると、ついに神と仏とは同体である、という思想が成立した。『仏と云ひ神と云ふは、無異無別なり。』足利尊氏は祇園社への願文のなかで『仏神たい（＝体）ことなりといへども、内外一なり』という。本地垂迹説は鎌倉時代になってからその教理的組織を完成し、それが明治維新のときまで観念的には、保たれていたものであった⁽²⁶⁾。

「神」は日本古来の宗教の対象であるのに対して、「仏」は外来の宗教の対象である。日本人の「寛容宥和の精神」は神仏習合、本地垂迹という考えを生み出し、対立を避けた。四－2 大黒の付く京都市町名について、で述べたように「えびす」（神）「大黒」（仏）というペアを創出したことは日本人の「寛容宥和の精神」の表れであろう。そのことは地名に

も表れ、「えびす」の付く京都市町名の近くには「大黒」の付く京都市町名が多く存在しているのは既に述べた通りである。

次に、日本（人）論から考察結果を見て言えるのは、日本人が「同音」に注目し、こだわっていることである。たとえば「えびす」「大黒」がペアとなる根拠として、「大黒天」（仏）＝「大国主神」＝「えびす神」（神）という関係が見られることが挙げられるのは既述の通りである。同音の「ダイコク」は又、「太極」にも通ずるものと考えられ「大極柱」「大黒柱」へと発展していったとする吉野（1994）の説も「同音」の重要性を示唆するものである。更に、四－4. 弁財天の付く京都市町名について、で言及したように「同音」から「弁才天」は「弁財天」とも表され、それは、福神への発展を意味していた。

以上のように日本（人）論から福神名の付く京都市町名を見ると、日本人の「従来のものを尊重し残そうとする」傾向（それは「崇り」を恐れる心情の反映であると考えられる）、「えびす」「大黒」ペアに見られる対立を避ける「習合」に表れる「寛容宥和の精神」（以上の二つは大きくは「与えられた現実の容認」というカテゴリーに含まれる）、「同音」への注目とこだわりが日本人の特徴として浮かび上がってくる。もっともこの特徴は現在から過去を見た結果、浮かび上がってきたものであって、それが今後も未来永劫、存続するかどうかはわからないが、何らかの形で残っていくのではないかと思われる。

本研究が現在に残存している、日頃、無意識に看過している京都市町名から日本人の過去から現在へ、そして恐らくは（たとえ伏在することはあっても）未来へと続いていくであろうある種の傾向を明らかにすることに寄与するならば望外の喜びである。

[注]

- (1) 中村元（1989）第二、三、四章。
- (2) 吉井良隆（1999）「えびす神研究」－ヒルコとヒルメ 吉井良隆編（1999）200頁。
- (3) 吉井良隆（1999）「えびす神研究」－ヒルコとヒルメ 吉井良隆編（1999）201頁。
- (4) 「えびす信仰」七つのキーワード編集部 吉井良隆編（1999）37頁。
- (5) 白鳥庫吉著『神代史の新研究』 吉井良隆編（1999）230頁。
- (6) 滝沢馬琴『燕石雑誌』巻一 吉井良隆編（1999）231頁。
- (7) 次田真幸（昭和48）「蛭子神話と太陽神信仰」 吉井良隆編（1999）243頁。
- (8) 次田真幸（昭和48）「蛭子神話と太陽神信仰」 吉井良隆編（1999）243頁。
- (9) 次田真幸（昭和48）「蛭子神話と太陽神信仰」 吉井良隆編（1999）244頁。
- (10) 吉井良隆編（1999）1頁。
- (11) 鈴木英一（1999）「舞台芸能における「えびす」」 吉井良隆編（1999）98頁。

- (12) 谷川健一（1998） 2 頁。
- (13) 川嶋将生・鎌田道隆（昭和 54） 66-67 頁。
- (14) 川嶋将生・鎌田道隆（昭和 54） 67 頁。
- (15) 笹間良彦（平成 5） 14 頁。
- (16) 笹間良彦（平成 5） 14 頁。
- (17) 笹間良彦（平成 5） 15 頁。
- (18) 笹間良彦（平成 5） 28 頁。
- (19) 同（18）。
- (20) 笹間良彦（平成 5） 29 頁。
- (21) 吉野裕子（1994） 34 頁。
- (22) 笹間良彦（平成 5） 178-179 頁。
- (23) 笹間良彦（平成 5） 179 頁。
- (24) 内藤湖南（昭和 44） 34 頁の次の文章はそれを裏付ける。「段々加茂の氏人が拡がってきて、元の出雲氏の占めておった京都の北部地方をだんだん占領しまして、出雲井於神社というもとの神様は隅のほうに押しやられて、その大部分は下加茂の境内になってしまったというかたちになったのでありますが、しかしそこを占領したからといって、他の氏族が崇敬しておった神社をむやみに取り払ってしまうということをしないのがわがいにしえの習俗である。この節のシナあたりの模様でありますと、革命になると前から尊敬しておった偉い人の祠などでもみな打ち壊して新しいものを祀^{まつ}っているというわけであります。日本は一つは風俗の敦^{あつ}いところからでもありましょう。一つはまたそういうことをしますとよく崇^{まつ}ったものでありますから、神様を取り除けるとかならずそれが崇るといので、おおかた崇りのために昔からあるものはそのまま据えてあった。」
- (25) 吉野裕子（1994） 149-150 頁。
- (26) 中村元（1989） 88 頁。

[引用文献・参考文献]

- 中村元（1989）『日本人の思惟方法』中村元選集〔決定版〕第3巻 春秋社。
- 吉井良隆編（1999）『えびす信仰事典』戎光祥出版。（本書内の引用論文等は〔注〕で明記した。）
- 谷川健一（1998）『続日本の地名－動物地名をたずねて－』岩波新書。
- 川嶋将生・鎌田道隆（昭和 54）『京都町名ものがたり』京都新聞社。
- 笹間良彦（平成 5）『大黒天信仰と俗信』雄山閣。

吉野裕子（1994）『十二支一易・五行と日本の民俗』人文書院。

内藤虎次郎（昭和 44）『内藤湖南全集』第九巻 筑摩書房。

（2003）『ニューエスト 26 京都府都市地図』昭文社。

（1979）『日本歴史地名大系第二七巻京都市の地名』平凡社。